



Title	山岳デスティネーションのブランド化における「範囲」と「主体」
Author(s)	天田, 顕徳
Citation	CATS 叢書 = CATS Library, 15, 73-90
Issue Date	2021-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82084
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS15_7.pdf



山岳デスティネーションのブランド化における「範囲」と「主体」

天田 顕徳

北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 准教授

1. 問題の所在と目的

本稿は，ニセコ町と観光学高等研究センターの第2回連携研究会において「山岳デスティネーションのブランド化と文化的資源」と題して行なった筆者の報告を再構成したものである。当日の報告は第1回研究会の議論を背景としていたため，本稿でも，議論に先立って第1回研究会の諸論点のうちから，本稿にとって重要なものについて振り返っておきたい。

まず，本稿にとっての「問い」あるいは「問題の所在」の基盤となるのは，第1回研究会における石黒侑介の提言である。それは，ニセコ地域が「山岳デスティネーション(Mountain Destination)」としてのアイデンティティを確立することが，持続可能なデスティネーション・マネジメントを進めることにつながる，というものだ。第2回研究会において筆者は，この提言に対し2つの新たな問いを提示して，議論の展開を試みた。その問いは，ブランディングを行うべき山岳デスティネーションの「範囲」はどこからどこまでが想定されるのかというものと，山岳デスティネーションとしてのアイデンティティを確立すべき「主体」は誰なのかというものである。本稿でも研究会同様，この2つの問いを議論の基調として，特に筆者の専門分野である文化資源を用いたデスティネーション・ブランディングの方途について検討を行う。

次に振り返っておきたいのは，ニセコ町側から課題として提示された以下の問題群である。

- ・ （町内における大型開発プロジェクトの状況について）個々の案件は規制ルール（準都／景観）の枠内だが，山岳リゾートエリアに開発が集中しているので，集中したエリアの自然と生活への影響を住民が懸念している
- ・ 立地エリアにとっての（開発に対する）可否判断の根拠（将来像）がない
- ・ 「sustainable」をミッションとするにあたり，環境保全と開発のバランスに関する合意形成がうまくできていない
- ・ ニセコらしい参加型の観光まちづくりが必要ではないか（町民の理解（納得感），わかりやすい評価の仕組み等）

本稿における筆者の目論見は，先に述べた2つの問いに筆者なりの視点から取り組むこと

を通じて、こうした諸問題を解決するための一定の示唆を汲み取ることにある。

本来、以上に掲げた「問い」や「目的」の持つ学問的な意味を論じ、研究の位置付けを明らかにしてから本論に入るのが通例ではあるものの、本稿の「学問的な意味」について延々と書き立てることは、ここで筆者に期待される役割ではないだろう。そこで、いささか散文的にはなるものの、本稿では事例を先行させる形で議論を進めていきたい。なお、発表を文章化するにあたり、読みやすさに鑑み適宜スライド（図）の入れ替えや削除を行ったことを断っておく。

2. 山岳信仰の聖地にみられるデスティネーションの範囲

早速、一つ目の問いに取りかかろう。デスティネーションの範囲についてである。第一回目の研究会において、石黒は各国の山岳デスティネーションの比較を行い、我々が注目すべきポイントの整理を行った。本稿でもそれに習い、デスティネーションの範囲に焦点を絞って、彼が挙げた事例の再精査ができれば良いのだが、残念ながら広範な事例を手際よく捌く能力を持たない筆者には、十全に事例のトレースが行えるとは思えない。そこで、本項では筆者の身近な研究フィールドに議論を引きつけ、「山岳信仰」という日本の伝統文化を用いた地域ブランディングの事例を比較材料として取り上げる。その際、フィールドにおける文化資源の利用のされ方にも注目しつつ、他の地域ではデスティネーションの範囲がどのように認識されているのかという点を確認していきたい。

こと日本において、山岳に関わる文化資源の存在を考える際に外すことのできないものが「山岳信仰」である。日本は国土の7割以上を山地が占める山国であり、古くから人々は山に対して神秘的な感情を抱いてきた。山岳信仰研究の分野では、山岳信仰の影響を受けなかった山はないとさえいわれており（西海ほか 2014: 4）、多くの山には山岳信仰に関わるモノやコトが存在している。現在では、そうしたモノやコトの観光活用が多く地域で行われているのだが、ここでは「山伏」を観光資源化している山形県鶴岡市羽黒町の例に注目してみたい。

山形県鶴岡市羽黒町は、日本の山岳信仰の中心的な聖地の一つである出羽三山の一角、羽黒山の麓に位置する地域である。同町の手向集落^{とうげ}には、近世期「麓三百坊^{ふもとさんびやくぼう}」と称される大規模な宿坊集落が形成されており、東北のみならず南関東や甲信越からも信者を集めていたことが知られている。参詣者らは同地を訪れた際、集落の宿坊に宿泊してから登拝を行うのが常であり（岩鼻 2017: 65-66）、宿泊者の世話をしたホスト役が山伏と呼ばれる宗教者である。山伏は宿泊者らの参拝もガイドしたほか、各地に存在した「講（中）」と呼ばれる在地の信者組織を定期的に訪問し、祈祷や配札を行い、宿坊の運営資金を稼いでいた。

他方で、かつて繁栄を極めた宿坊街も、現在は「講」の減少や、それに伴う収入減、宿坊の担い手不足に悩まされており、2020年1月現在の宿坊数は27にまで減少している（羽黒町観光協会）。神社関係者や宿坊関係者などの集落内外有志より結成された協議会「出羽

三山門前町プロジェクト」は窮状の原因が「地域経済の衰退」にあるとして次のように分析する¹⁾。

特定地域から出羽三山に定期的に来訪し参拝する、信仰を中心に据えたグループ来訪のことを「講中」というが、現在、この出羽三山講中の高齢化が進み、世代交代が行われていない。羽黒山山麓の手向地区の収入は、この講中からの収入（お札、祈祷、寄進、団体での来山支出など）が大きな柱となってきたため、講中が衰退し、来山頻度が減っていることが、地域経済の衰退に直結している。

（中略）

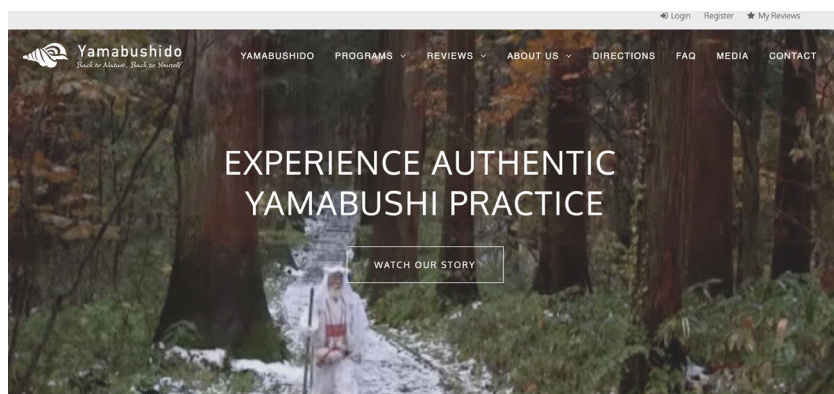
講中の衰退によって、出羽三山の景観を構築し、担い手の一つだった宿坊の生業が難しくなっている。江戸時代に300軒あった宿坊が、昨年30軒をきり、29軒となった。この5年間のうちにさらに10軒近くの宿坊の存続が危うくなっている。グループでの来訪客を受け入れる仕組みでできている宿坊にとって、少人数での個人来訪の受け入れは、生業構築には繋がりにくく、新たな来訪者である、観光客やインバウンド客を受け入れる体勢作りが進んでいない。

この分析が明らかにしているように、既存の信者のみを主要な顧客としてきた地域経済が現在、行き詰まりを見せているのである²⁾。神社関係者や宿坊関係者の一部は「このままでは、観光客が来ても、門前町としては寂れてしまう。将来的には講中だけに頼るのは難しいため、今後、地域の収入源を確保するかが大きな課題となっている。観光客を誘致するだけでは、地元になりわいが残らないため、収入を得られるしくみや産業を地域に作っていく必要がある」³⁾と考えており、信徒組織を前提とした地域経済から持続可能な地域経済への移行が模索されている。

こうした状況を背景に、地域が状況打開のために打った手が、宿坊の経営者である山伏たちの宗教活動を観光資源として用いるという方法であった。そうした取り組みのひとつとして、インバウンド向け山伏体験ツアー「Yamabushido」の内容を簡単に紹介してみよう。

「Yamabushido」は「Yamabushi（山伏）」という言葉と、「Bushido（武士道）」を組み合わせた造語である。Bushido というインバウンドにも馴染みのある言葉を使うことで、外国人観光客の関心をひこうとしている。Yamabushido では3泊4日の「Masters Training」と1泊2日の「Basic Training」という2つの商品プランが用意されており、どちらのプランでも「Authentic」（真性な／本物の）な山伏体験をできることが売りになっている。

宿坊と手を組み同ツアーを企画する会社は、ツアーの企画段階で「VISIT JAPAN Travel & MICE Mart 2017」への出展や、海外のバイヤーらとの積極的な意見交換を行っており、インバウンド・ツーリストのうち、以下4つのタイプをツアーのターゲットとして選定している。第一のターゲットは、日本の歴史や文化に興味を持ち、それを知るひとつの手段とし



出所：Megurun Inc. (2021) より転載

図 1 Yamabushido のトップページ

販売に向けた取り組みの例

- ✓「Visit Japan Travel & MICE Mart 2017」に出展
- ✓ファームツアーの開催

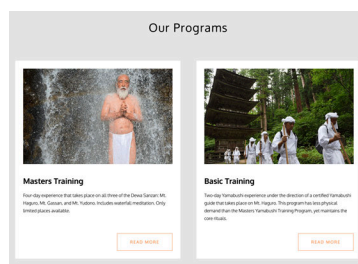
Educated：日本の歴史や文化に関心を持つ人々

Luxury：さらなる付加価値を求め特別な体験を求める人々

Team building：法人向けの研修プランなど

Spiritual：いわゆるスピリチュアルな関心を持つ人々 以上をターゲット層に。

3泊4日で約25万円のツアーを販売。年間目標数は400～500名。[天田2020：184-185]



出所：筆者作成

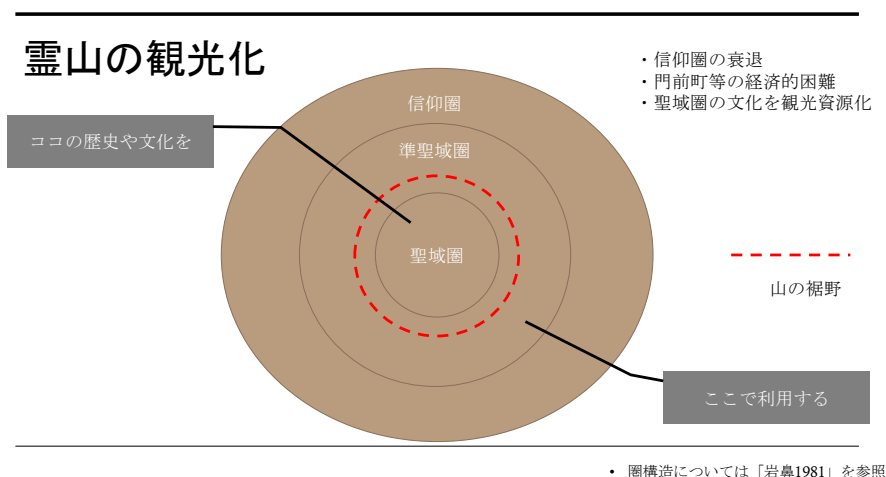
図 2 鶴岡における文化資源活用 の例

て山伏を体験したいという層である「エデュケーテッド（成熟した旅人たち）」、第二のターゲットは第一のタイプにさらなる付加価値やオプションなどを付け、特別な体験を求める層である「ラグジュアリ」、第三のターゲットは法人向けの研修などのプランを求める「チームビルディング」、そして、山伏修行の内容をそのまま体験したいような「スピリチュアル」である。同社のプロジェクトマネージャーはこうした人々にツアーを販売することで、年間400人から500人程度の集客を目指すと同時に、ツアーを支える山伏の後継者育成も行っ

ていきたいとしている（天田 2020）。この事例以外にも羽黒町観光協会主催の「山伏修行体験塾」など地域には多数の山伏関連イベントが存在しており、人気を博している。

さて、ここまで他の地域の事例を具体的に追ってきたが、筆者はこの事例に、山岳信仰の聖地で行われる典型的な文化資源活用のあり方と、そこで想定されているデスティネーションの範囲がよく現れていると考えている。地理学者の岩鼻通明は、出羽三山の信仰が、霊山の山頂を中心とする女人禁制の聖域である「聖域圏」、宿坊などが展開する「準聖域圏」、在地の講が分布する「信仰圏」からなることを明らかにしている。こうした理解に基づき、近年の鶴岡の観光化のあり方を分析すると、概ね次のようなことがいえるだろう。まず、現在の羽黒では講の先細り＝信仰圏の縮小あるいは消滅を受けて、準聖域圏である宿坊街が衰退している。その結果、準聖域圏に住む人々は、本来限られた宗教者のものだった聖域圏における山伏修行を観光資源として活用しているという図式である。

同時に、この図式からは、山岳信仰を使って地域ブランディングを行う地域で想定される山岳デスティネーションの範囲も見えてくる。すなわち、信仰の対象だった山頂を含む聖域圏と、宿坊などが展開する準聖域圏がそれに相当するというものだ。岩鼻の指摘する圏構造は多くの霊山にも共通し、「聖域圏」の文化資源を「準聖域圏」において観光利用するというあり方は、管見の限り、出羽三山に特別なものではない。信仰の山を擁する多くの地域では、ごく一般的に実践されている手段であるといってもよいだろう。



出所：筆者作成

図3 山岳信仰に関わる地域ブランディングの典型例

3. 包括的な「コンテキスト」の不在

では、こうした知見は、ニセコ地域にどのような示唆をもたらすだろうか。例えば、「聖域圏」の文化を「準聖域圏」で活用するというあり方は、ニセコ地域においても可能なのだろうか。

ニセコ地域の代表的な山である羊蹄山を例に考えてみよう。先に述べたとおり、山岳信仰研究の分野では山岳信仰の影響を受けていない山は存在しないとされており、実際に、羊蹄山にも信仰の痕跡を見つけること自体はさほど難しいことではない。だが、羽黒山においては一山組織いっさんそしきと呼ばれる僧侶や神官、山伏たちからなる宗教集団が、組織的に山岳信仰を支えていたのに対し、羊蹄山には山頂を聖域化し、信仰を周囲に広げていくような組織的な基盤が存在していなかったという点で、両山は、状況を全く異にしている。その結果、羊蹄山には山岳信仰に関わるハッキリとした圏構造は存在していない。地域の他の山々も状況は同じである。従って筆者は、羊蹄山をはじめとしたニセコ地域の山々に山岳信仰に関わる典型的なデスティネーション・ブランディングの手法を単純に当てはめることは難しいと考えている。

正直に告白すれば、筆者はこれまで羽黒山のように圏構造が一定程度自明な地域をメインのフィールドとして調査を行ってきたため、状況の異なるニセコ地域で山岳デスティネーションのブランド化を考えることは少々荷が重かった。地域を山岳デスティネーションとしてブランディングする際に、どんな範囲を対象とすれば良いのか、どんな資源が活用できるのかなど、基本的な理解が不足していたのである。そんな経緯もあって、まずは現地に足を運ぼうと決意し、2020年10月21日～22日に現地での調査を行なった。結果的に、この調査は筆者に小さな気付きをもたらし、ニセコ地域で想定しうる山岳デスティネーションの範囲と、活用しうる地域の文化的資源について筆者なりの考えを持つに至っている。以下、筆者の実施した現地調査を振り返って現在の所感を述べたい。

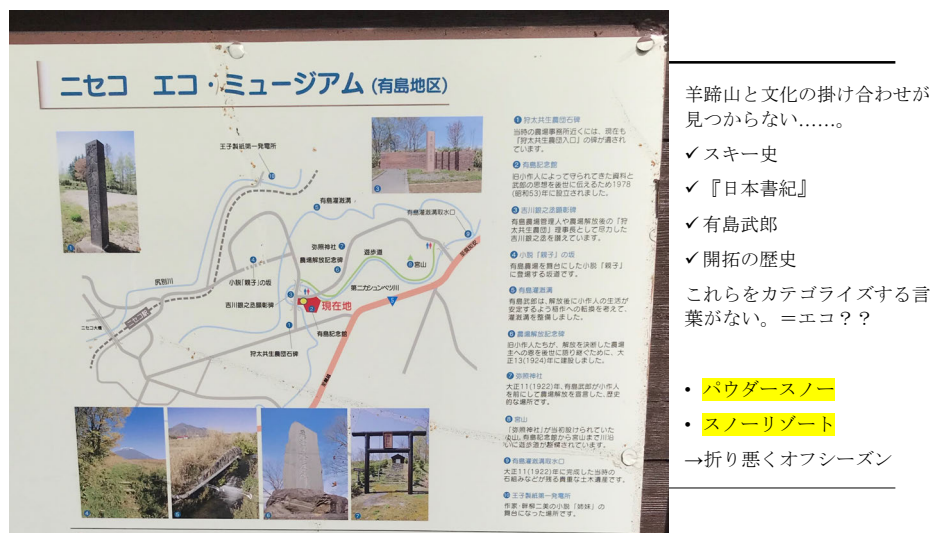
まず調査の行程を確認しよう。調査初日の10月21日、レンタカーで札幌を出発した筆者は、国道230号線で中山峠を経由し喜茂別町へ。その後、国道273号を使い、京極町・倶知安町経由でニセコ町に向かった。羊蹄山の麓を、喜茂別町をスタートとして左回りに回った形である。途中、比羅夫神社や倶知安神社などの「信仰」に関わりそうな場所や、倶知安風土館や有島武郎記念館などの「文化」に関わりそうな場所では車を降りて、状況確認や聞き書きなどを行なった。初日は午後からニセコ町役場で打ち合わせを行い、ニセコ町内に宿泊している。

翌22日は曾我北栄環状列石を見学した後、地域の小祠や石碑類を確認しながら羊蹄山へと向かった。倶知安町からの登山口を利用して羊蹄山にアクセスし、半月湖までの登山道を確認した。既に述べたとおり、ニセコ地域で想定しうる山岳デスティネーションの範囲と活用しうる地域の文化的資源について、十分な目星がついていなかった筆者は、まずはそれらを探ることを調査の目的として設定した。

論旨を際立たせるために、再び告白をするが、現地に足を運んでもなお筆者はやや苦しい思いをしている。何かがどう苦しかったのか。現地のモノに即して説明してみよう。図4は有島記念館に設置された看板を映したスライドである。本稿の図では看板の文字を判別することは難しいが、看板には①狩太共生農団石碑、②有島記念館、③吉川銀之丞顕彰碑、④小説「親子」の坂、⑤有島灌漑溝、⑥農場解放記念碑、⑦弥照神社、⑧宮山、⑨有島灌漑溝取水口、⑩王子製紙第一発電所などの「文化的なモノ」と呼ぶことができそうなものが複数紹介されている。

筆者自身、不十分ながらも地域の歴史や文化資源について下調べをして現地入りしたこともあり、阿部比羅夫伝説や、レルヒ中佐の足跡と関わるスキー発展の歴史、有島武郎による農民解放の歴史、開拓の歴史などに関わるモノやコトを現地においてすぐに見つけることができた。つまり上の看板で紹介されているような「文化的なモノ」それ自体は、簡単に見つけることができたのである。

それにも関わらず筆者が苦しんだのは、それらのモノを包括的に一定の「範囲」に文脈付ける、いわばデスティネーションの「コンテキスト」のようなものを中々見つけることができなかったからだ。これまでの筆者の調査地では、聖域圏においては「磐座^{いわくら}」などと呼ばれる霊石や「奥の院」などの堂社が存在し、準聖域圏には、宿坊や里宮などが存在していた。そして、それらのモノは全て「山岳信仰」というコンテキストの中に位置付けることができ



出所：筆者作成

図4 ニセコ エコ・ミュージアムの看板

たのである。それに対して、ニセコ地域で筆者が目にしたモノ群は、一定の地域に存在する包括的なコンテキストではなく、先述した阿部比羅夫や有島武郎などの様々なコンテキスト群に回収されてしまう。そして、それらのコンテキスト群は、コンテキストに関わるコンテンツの分布範囲がそれぞれ異なっている。こうした状況で、いかにして一定範囲を山岳デスティネーションとしてブランディングしていくのか、この方途に見当がつかなかったのだ。

上で取り上げた看板では、様々なコンテキストを持つモノ群が「ニセコ エコ・ミュージアム」というコンセプトのもとで紹介されていた。諸々のコンテキストを「エコ」という言葉で表現することは果たして適当なのか。少なくとも筆者にとっては「しっくり」こなかったのである。

4. 石造物にみる「祈り」と「くらし」

そんな筆者にとって、一筋の光となったのが倶知安神社で発見した^{ジジントウ}地神塔と呼ばれる石造物だ（図5）。

一見、暮石のようにも見えるが、一番上の石が五角形になっており、それぞれの面には天照大神などの神号が刻まれている⁴⁾。農業と関係の深い神の名が刻まれ、作農の神として造立されることが多いと指摘されている（梅原 1984）（村田 2019）。この地神塔を発見した際、筆者は軽い「違和感」を覚えたのだが、この感覚が後に筆者にとっての導きの糸となる。

北海道の地神塔について研究を行なった梅原は、北海道の地神塔に徳島からの影響をみる（梅原 1984, 1985）。徳島では近世期において、藩の強い主導で地神塔の造立がすすめられていたと考えられており（高橋 2004: 1）、地神塔の造立と塔の前で行われる祭儀は、図6左掲の『神仙靈章春秋社日醯儀（以下『醯儀』）』に従って行われていた可能性があるという（梅原 1984: 82）。いうなれば、徳島の地神塔には、ある程度の「基本型」が存在しているのである。北海道の地神塔にも同書の内容を反映するものが多い。

『醯儀』の説明によれば、地神塔は「天照大神」の名が刻まれた面（仮に正面と呼ぶ）を北に向けて建てることになっており、徳島では正面が北面する地神塔の存在が数多く報告されている（高橋 2004）。先に述べた筆者の「違和感」はこの基本型に関するもので、倶知安神社の地神塔を見た際、初めての土地で正確には判じかねたものの、地神塔が北を向いているようには思えなかったのである。結論からいえば、倶知安神社で見つけた地神塔2基はやはり北面しておらず、概ね羊蹄山に正面を向けて南面する形で立っていた。こうした基本型に沿わない地神塔は「変則地神塔」などと呼ばれており、変則的な神名を刻んだ地神塔や、変則的な造立形態を持つ地神塔が存在することが報告されている（高橋 2009）（庄武 2019）。一見、暮石のようにも見えるが、一番上の石が五角形になっており、それぞれの面には天照大神などの神号が刻まれている⁴⁾。農業と関係の深い神の名が刻まれ、作農の神として造立されることが多いと指摘されている（梅原 1984）（村田 2019）。この地神塔を発見した際、筆者は軽い「違和感」を覚えたのだが、この感覚が後に筆者にとっての導きの糸となる。

そんな中見つけたのが この地神塔

- 地神塔：大地を祀る石塔（大まかですが）。これは五神号型と呼ばれる五角形。
- 農業に関係の深い神号が掲げられ、作農の神として造立される場合が多い。

写真は天照大神、大国主大神、猿田彦大神、大宮媛大神、倉稲魂大神の神号

参考：[小林1945] [梅原1984]
→「開拓移民」の文化に関する研究

右の地神塔を見ていて気付いたことが。



出所：筆者作成

図5 地神塔（倶知安神社）

北海道の地神塔について研究を行なった梅原は、北海道の地神塔に徳島からの影響をみる（梅原 1984, 1985）。徳島では近世期において、藩の強い主導で地神塔の造立がすすめられていたと考えられており（高橋 2004: 1）、地神塔の造立と塔の前で行われる祭儀は、図6左掲の『神仙靈章春秋社日醯儀（以下『醯儀』）』に従って行われていた可能性があるという（梅原 1984: 82）。いうなれば、徳島の地神塔には、ある程度の「基本型」が存在しているのである。北海道の地神塔にも同書の内容を反映するものが多い。

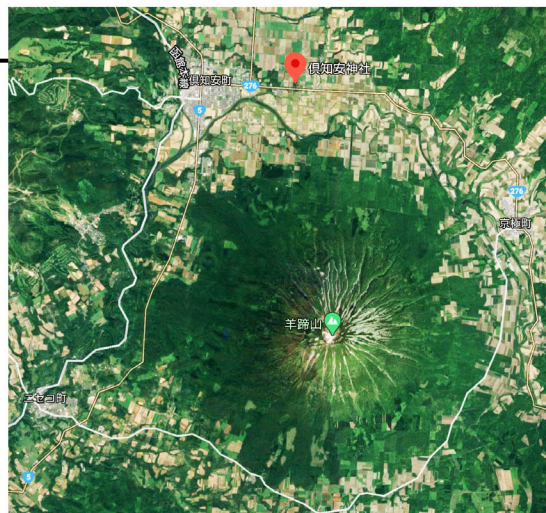
『醯儀』の説明によれば、地神塔は「天照大神」の名が刻まれた面（仮に正面と呼ぶ）を北に向けて建てることになっており、徳島では正面が北面する地神塔の存在が数多く報告されている（高橋 2004）。先に述べた筆者の「違和感」はこの基本型に関するもので、倶知安神社の地神塔を見た際、初めての土地で正確には判じかねたものの、地神塔が北を向いているようには思えなかったのである。結論からいえば、倶知安神社で見つけた地神塔2基はやはり北面しておらず、概ね羊蹄山に正面を向けて南面する形で立っていた。こうした基本型に沿わない地神塔は「変則地神塔」と呼ばれており、変則的な神名を刻んだ地神塔や、変則的な造立形態を持つ地神塔が存在することが報告されている（高橋 2009）（庄武 2019）。

「デスティネーションのコンテクストがない」などと横文字を並べていたかと思えば、急に石塔について語り出す筆者の議論の行く先について、訝しむ向きもあろうが、もう少しだ

け石の話にお付き合い頂きたい。件の「変則地神塔」が造立される背景には様々な事情が存在している。一例を挙げよう。徳島県阿南市の地神塔調査によれば、同地には北向きの地神塔が優勢の地域と、そうではない地域が存在するという。調査では北向きが優勢の地域では農耕が中心であるのに対し、海に臨む地域では正面を海に向けた地神塔が多いことが明らかにされ、海に臨む地域においては、変則地神塔に「航海安全」の願いが託された可能性が示唆されている（阿南市婦人ボランティア活動文化財愛護コース編 1981: 17）。

この先行研究を参考にいえば、「蝦夷富士羊蹄山神社」が倶知安神社に鎮座していることから察せられるように、ニセコ地域には羊蹄山を神聖視する文化があり、変則地神塔の向きからは羊蹄山を神聖視する人々の心性を読むことができるといえるかもしれない。山は農地にとっては重要な水源地であり、しばしば「水分の神」などが祀られ、豊かな実りが祈られてきた。ニセコ地域で生活をしてきた人々も、作農の神である地神塔の正面を羊蹄山に向けることで、山に豊作を祈りながら暮らしてきた可能性がある。

もちろん、こうしたことをいうためには、地域の地神塔の悉皆調査や、関係者への聞き書きなど、丁寧な民俗調査を行う必要がある。現実的には、地神塔が道路の拡幅工事などで場所を移され、「道路に面した形」で据えられる例もあり、ごく限られたサンプルのみでそれをいうことには、当然かなりの無理がある。従って、上記の筆者の指摘にさしたる意味はないし、指摘というよりも「連想ゲーム」のような話である。しかしその「連想ゲーム」が、人々の「祈り」を想起させ、ひいては地域で生活をしてきた人々の「くらし」の存在に筆者の目を向けさせてくれたことが、先に述べた筆者にとっての一筋の光明となった。



・左図「春秋社日醮義」より本朝社之略図

国立国会図書館デジタルコレクションより

出所：筆者作成

図6 『春秋社日醮義』と地神塔の所在地

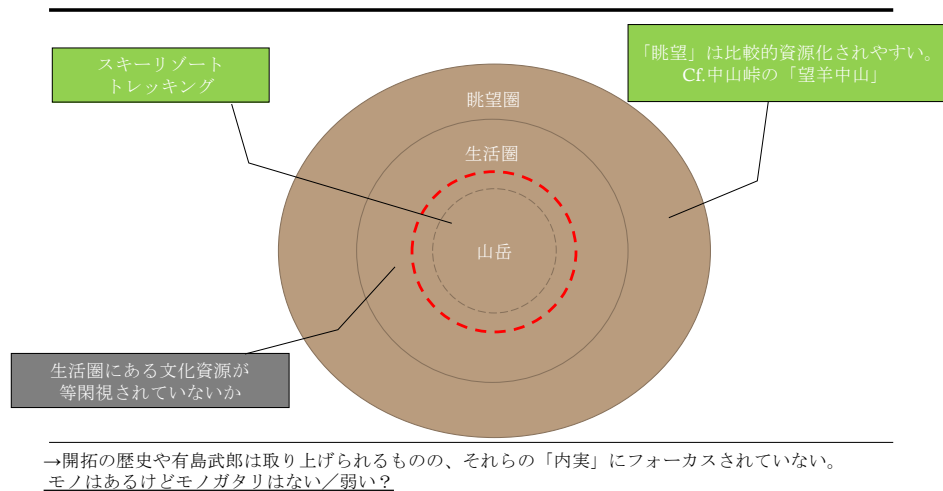
これまで民俗学や歴史学では、関心を持たない人にとっては何の価値も持たない路傍の石造物に、人々の「祈り」の存在を見出し、それを造った人々の「くらし」や「思い」を汲み取る作業が行われてきた。地神塔に関しても同様である。例えば、岩見沢市北村の地神塔の造立年と地域の造田運動との関連を指摘した村田は、地神塔造立の背景に「“北海道で米をつくる”という移住者の悲願」が存在していたことを指摘している。また、戦後に建立された地神塔に関しても「敗戦後、どのように新しい時代の農業を切り拓いていくかという思いが込められています。また、昭和40年代になると、本格的な基盤整備事業で泥炭地を改良し、水田経営の近代化に立ち向かうという決意が建立を促したのでしょう」(村田 2019: 27)とし、地神塔建立の背景に、土地の人々のくらしや思いを読んでいる。

道外出身で初めてニセコを訪れた筆者にとって、やはりニセコのイメージは「スノーリゾート」だった。しかし、そうした「一般的な」イメージの背景には、先人のどんなくらしがあったのか。道内屈指の積雪量を誇る同地に移住し、地神塔に切実な祈りを託して暮らしてきた人がいたかもしれない。『カインの末裔』を地で行くような、薄い着物を着て、飢え切り、羊蹄山の麓を痩せ馬の手綱をとって歩いていた人もいたのではないかと。幾分叙情的になったが、変則地神塔はこうした思いを筆者に去来させると共に、「パウダースノー」や「スノーリゾート」ばかりに焦点が当たる現在のニセコ地域のブランディングにおいて「人」や人々の「くらし」が随分と後景化されているのではないかとその思いを筆者に抱かせたのである。

再び話の抽象度を上げて、議論を山岳デスティネーションの「範囲」に戻そう。変則地神塔との出会いを経て、人々のくらしに思いを馳せた筆者は、地域の現状を、あくまで試論的にではあるものの、以下のような圏構造(図7)として理解できるのではないかと考えている。岩鼻の山岳信仰に関わる圏構造を換骨奪胎するような仕方で設定したもので、中心としての〈山岳〉、山を利用し山の裾野や麓で生活をしてきた人々の暮らす〈生活圏〉、生活圏の外側に広がる〈眺望圏〉からなる圏構造である。仮にこうした図式を羊蹄山に当てはめた場合、現在の地域の観光に関わる状況は次のように整理できるだろう。まず、圏構造の中心である〈山岳〉はスキーやトレッキングなどのアクティビティを中心に十分な資源利用が行われている。こうした状況は〈眺望圏〉においても同様で、例えば中山峠に存在する道の駅「望羊中山」などは読んで字の如く羊蹄山への眺望をPRポイントの1つにしている。この他にも羊蹄山の眺望をうまく利用した施設は多くあり、眺望の資源化も積極的に行われているとみることができる。

それに対し、〈生活圏〉はどうか。山岳におけるアクティビティの「基地」としては機能しているものの〈生活圏〉の資源を山と文脈付けて積極的に活用しようという動きが他の圏域に比べ極めて弱いのではないかと。先に、羊蹄山周辺には文化的なモノが数多く存在している一方で、それらを包括的に一定の範囲に文脈づけるようなコンテキストが存在していないことを指摘したが、それは、地域において「〈生活圏〉のブランディング」がうまくいっていないことを端点に示す事実であるとみていいだろう。山岳デスティネーションのブランデ

ィングを、以上のような圏構造を用いて考えてみると、〈生活圏〉に関わる魅力的なコンテンツをいかに用意するのかという点が、地域の今後の課題として浮かび上がってくる。



出所：筆者作成

図7 山岳デスティネーションの観光化に関わる圏構造

5. 再帰的なニセコ・アイデンティティの構築へ

では、こうした課題に対して、本稿は何かしらの有効な示唆を示すことができるだろうか。ここまでの議論を通じて本稿が示すことのできる1つのアイデアは、現在「スキーリゾート」という看板の裏に後景化している、山とともに生きてきた人々／生きている人々の「くらし」を資源化するという手段である。地神塔や馬頭観音、初老祝の碑など、ニセコ地域には自然環境と人々の生活が織りなす文化的景観が存在している。有島武郎の作品などの既存の文化的なモノも「くらし」との親和性が高い。あるいはリゾートにおける「くらし」＝ライフスタイルをブランド化することも可能かもしれない⁵⁾。

ただ、そうした戦略が「経済的な価値を持つのか」という問題や「他の地域と差別化できるのか」、「競争力を持つのか」という、観光マーケティング的な発想からすれば「当たり前の問い」に対して、残念ながら筆者は答えを用意することができない。能力を棚に上げていってしまうと、専門分野が異なるのだ。それに関わらず、こうしたある種「無責任な」物言いをしたのは、筆者が専門の一つとする民俗学的な観点に立った場合、生活圏における「くらし」の存在を資源化していくことは、地域にとって一定のメリットがあると考えからで

ある。

では、それはどのようなメリットなのか。本稿は冒頭において、第1回研究会でニセコ町側から示されたいくつかの課題を確認した。番号を振って再掲しよう。

1. (町内における大型開発プロジェクトの状況について)個々の案件は規制ルール(準都／景観)の枠内だが、山岳リゾートエリアに開発が集中しているので、集中したエリアの自然と生活への影響を住民が懸念している
2. 立地エリアにとっての(開発に対する)可否判断の根拠(将来像)がない
3. 「sustainable」をミッションとするにあたり、環境保全と開発のバランスに関する合意形成がうまくできていない
4. ニセコらしい参加型の観光まちづくりが必要ではないか(町民の理解(納得感), わかりやすい評価の仕組み等)

先だって、「パウダースノー」や「スノーリゾート」というデスティネーションのイメージに対して、「人」や人々の「暮らし」が後景化しているのではないかと指摘したが、筆者の見立てによれば、上記の課題群1～3には、地域の人々の今後の「暮らし」に対するビジョンの不明確さという問題が共通して横たわっているように思われる。

先回りしていえば、本稿がここで示したいメリットとは、地域の「暮らし」を資源化していくことは、地域の今後の「暮らし」に対するビジョンを作ることに資するのではないかとということである。その際、筆者の考える最も重要なポイントは「資源化の主体」で、本稿では地域に住む人々が自ら、自分たちの地域を客体化し、資源化していくことのもつ意味や価値を強調してみたい。少々迂遠な説明となるが、近年の民俗学の議論を振り返る形で話題を展開していこう。

民俗学者がしばしば従事する仕事の1つに自治体史の編纂がある。都道府県史や市町村史などがそれだ。特定の本を念頭においているわけでないが、大方の人間にとって、つまらなくて、ただ分厚いだけの本である。図書館の隅で埃を被っているあの本だ。調査研究などで自治体史を使う奇抜な人間でも、どこかの自治体史を初めから終わりまで「通読した」ことがある人はかなり少ないのではないだろうか。実は昨今、民俗学の界限では、こうした自治体史の「つまらなさ」を問題にする研究者が現れ始めており、そうした研究者を中心に、「手に取ってもらえて」、「行政が指針を得ることもできるような」新しい形の自治体史を編纂しようとする動きがある。

例えば、図8に掲げたのは福岡市史の民俗編の一コマである。この本の大きな特徴は、自己言及性と多声性で、研究者によって現地の「民俗」が一方的に解説されるのではなく、ほぼ全ページを通じて福岡で暮らしている人々のマチに関する語りがそのまま掲載されている。この本を編集・執筆した民俗専門部会の部会長である九州大学(当時)の関一敏は、編集の目的を「このマチに生きてきた人々の知恵が時代に応じてどのような形で受けつがれてきた

新しい自治体史（福岡市史特別編『福の民』） ポイントは「自己言及性」と「多声性」

- このマチに生きてきた人々の知恵が時代に応じてどのような形で受けつがれてきたか、今を生きる人々がどのような工夫と創意をもってこの時代を生きているか、そして、これからマチがどのような形で先祖たちの知恵をふまえた繊細で大胆な飛躍をとげうるか、を明らかにすること。〔関2012：8〕

→暮らしを描くことで「マチや住民のアイデンティティ」を確立する狙い。



出所：筆者作成

図8 「新しい」自治体史の例

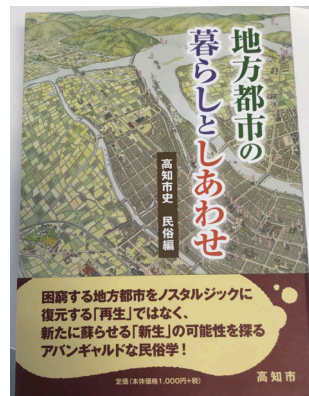
か、今を生きる人々がどのような工夫と創意をもってこの時代を生きているか、そして、これからマチがどのような形で先祖たちの知恵をふまえた繊細で大胆な飛躍をとげうるか、を明らかにすること」（福岡市史編集委員会 2012）であるという。同書はさらに、人々が時に苦心惨憺をして得てきた「生活の技法」を読者との共有財にすることも狙っている。

図9は『高知市史 民俗編』である。こちらの本は研究者達の記述を基調としているものの、通常の自治体史があまり扱わない女性達の日頃の買い物の様子や、商店街の小さな店の様子、闇市、音楽など、地方都市におけるありきたりの「くらし」に詳細な目配りをしている。これまでの民俗学が「ムラ」などに伝えられてきた古い日本文化（民俗文化）の研究を主軸としてきたのに対し、この本では高知の人々の「くらし」を「生活文化」と表現し、それを記録に値する「民俗」とであると捉えて詳細に記述している点に特徴がある。

少し脱線するようだが、この「民俗」という概念について、民俗学者の関一敏は次のように説明する。いわく、民俗とは当事者たちによるメタ・レベルの解説を与えられない、本来的に名づけえぬものとしてあった領域だという（関 1998: 15）。そして、これまでこうしたありようを当事者に変わって客体化し、「民間信仰」や「生業」、「芸能」などと命名＝カテゴリー化してきたのが、民俗学者や人類学者達だった（門田 2014: 249）。だが、福岡市史や高知市史にも表れている通り、現在ではこうした名付けを研究者が一方的に行ってきたことに対する反省の動きが見られる。これまでは研究者が地域の「くらし」を一方的に表象してきたのに対し、昨今では「くらし」を調査し表象していくという営為が、研究者と市民の共同によって、あるいは、市民自らの手によって展開しつつあるのだ。

「暮らし」や「しあわせ」を プラットフォームにして議論する

- 「民俗」は生活文化とも言い換えることができるが、その「生活」とは、結局のところ私たちが夢想する「しあわせ」を実現するための行為である。ある地域における生活の記述とは、その地域に生まれ、暮らす人々が抱いた「しあわせ」を描きだすことでもあるのだ。〔高岡 2014:5〕
- 2010年頃より盛んに、政策決定のヒント／ステークホルダー間の対立を和らげた例も。



出所：筆者作成

図9 『高知市史 民俗編』

こうした状況は公共民俗学という分野で特に活発に議論されている。民俗学者の菅豊は、市民による里山研究や環境保全運動を事例に取り上げ、市民らが「調べる」という行為を通じて、「近隣」や「地域」の他者、それらが保持してきた「文化」や「歴史」を発見し、さらに、その行為を通じた新しい人間関係のリフレクシブな発見をしているという点や、「新しく移住してきた人びとが、先住の人びとを「調べる」という実践を通じて、その理解を深め、心の部分を含めて、さらにそれとの結びつきを強化」していることを指摘する（菅 2013: 214-215）。本稿にとってこの菅の指摘は重要だ。それは、市民が本来は意識もしていなかった＝関の言葉を借りれば「名づけえぬもの」だった自らの「暮らし」を客体化し、「調べる」という実践を通じて、再帰的な地域アイデンティティとも呼びうるものを獲得している点が明らかにされているからである。

先に取り上げた高知市史は、人々の「暮らし」を「結局のところ私たちが夢想する「しあわせ」を実現するための行為である」とし、「ある地域における生活の記述とは、その地域に生まれ、暮らす人々が抱いた「しあわせ」を描きだすことでもある」（高知市史編さん委員会 2014: 5）という。筆者は先に、現在のニセコ町の課題の背景に、地域の人々の今後の「暮らし」に対するビジョンの不明確さをみたが、このロジックを使つていうならば、今後の「暮らし」に対するビジョンの不明確さは「しあわせ」に対するビジョンの不明確さとも無関係ではないはずである。課題2にはいみじくも「可否判断の根拠（将来像）がない」という言葉が出てくるが、平たく言い換えれば、どんな「しあわせ」を実現するために、どんな「暮らし」を選択していくのかという点について、地域住民が共有する一定のビジョンがないことこそが問題の本質なのではないだろうか。そうであるとするならば、これまでの「暮らし」を振り返り、今後地域でどう「暮らし」ていくのかを地域住民自身が調査し、

考え、自らの「暮らし」をブランディングしていくことが重要になるのではないか。そうした営為の中で、対内的にも対外的にも魅力的な再帰的ニセコ・アイデンティティを確立していくことが持続可能な観光ブランディングの要諦になるといえるだろう。

現代のコミュニティ論に見る 住民参加の効用

- ・現代の「コミュニティ」は、地理的な範疇や固定的な社会集団に由来する「共同体」としてではなく、「流動的でありながらも、人々の再帰的な帰属感」によって生み出される共同性として理解すべき。「地域イベント」や「街づくり」はそうした共同性を生み出すべく、地域自らが再帰的に場所のアイデンティティを確立しようとする過程。[鈴木2013：195-196]。
 - ・すなわち彼らは、自分たちの地域やそこで営まれる様々な文化的実践を調査しながら、自分の地域とは何か、そこに住む自分とはいかなる存在であるのかを彫琢しているのである。[門田2014：252]
- 住民自身が再帰的に場所のアイデンティティを獲得
-

出所：筆者作成

図 10 現代のコミュニティ論に見る住民参加の効用

6. 結論

「あっちに行ったり」「こっちに行ったり」を繰り返しながら、我々はようやく結論に辿り着くことができた。多言を弄してきたので、結論は極力わかりやすくシンプルな方が良いでしょう。ここまでの議論を踏まえ、筆者が提言できることは以下の3点である。

- ・山岳デスティネーションの範囲を仮に、山岳・生活圏・眺望圏とした場合「生活圏」の文化資源（＝山とともにくらしてきた人々の歴史）のブランディングが手つかずなのではないか。
- ・生活圏の文化資源をつかったブランド化を「住民」が主体的に行う／行える環境作りをすることがニセコの「再帰的な場所アイデンティティの構築」に資するのではないか。
- ・それを構築することが立地エリアの将来像を考える際の重要なプラットフォームの一つになるのではないか。

以上を提言し、本稿の結論とする。

注

- 1) 同団体作成資料「農山漁村振興推進計画」中、「地区の現状・課題」より。
- 2) 筆者はこれを霞・檀那場経済の衰退と呼んでいる（天田 2020）。霞や檀那場とは山伏の支配地域を表す歴史用語である。
- 3) 前掲「農山漁村振興推進計画」中、「地区の課題」より。
- 4) ここで示したものは「五神号型地神塔」と呼ばれるものである。地神塔には他にも様々な形があることが報告されているが、論旨に鑑みて本論では割愛する。
- 5) スノーリゾートという「観光のまなざし」の背景に人々の「くらし」が後景化しているという問題意識や、山とともに生きていく人々／生きている人々の「くらし」を資源化するという本稿のアイデアは、美瑛町の農業観光を分析した西川克之の議論とも問題意識を共有するものであると思われる（西川 2017）。観光のまなざしに関する理論的な整理を行った上で、美瑛町の今後の観光のあり方について具体的な提言を行う西川の議論は、ニセコ地域にとっても有益である。注記して参照を促したい。

文 献

天田顕徳

2020 「「山伏文化」の商品化・資源化 山形県手向集落を事例に」『現代宗教とスピリチュアルマーケット』弘文堂。

阿南市婦人ボランティア活動文化財愛護コース編

1981 『地神さんの調査（その2）』阿南市教育委員会。

福岡市史編集委員会

2010 『福の民 暮らしの中に技がある 新修 福岡市史 特別編』福岡市。

岩鼻通明

1981 「観光地化にともなう山岳宗教集落戸隠の変貌」『人文地理』33(5)。

門田岳久

2014 「自分自身について語ること 民俗学における再帰性」『〈人〉に向きあう民俗学』森話社。

小林己智次

1945 「江匡弼撰春秋社日醮儀——地神祭の起源に関する古文献」『北海道帝國大學法經會法經會論叢』11。

高知市史編さん委員会

2014 『地方都市の暮らしとしあわせ 高知市史 民俗編』高知市。

村田文江

2019 「北村の歩みに向きあう——地神碑：五社大明神をめぐる」『開発こうほう』7月号。

西川克之

2017 「イメージの呪縛を解くために：美瑛における「観光のまなざし」の向こう側」『CATS 叢書』11。

西海賢二・時枝務・久野俊彦

2014 『日本の霊山読み解き辞典』柏書房。

関一敏編

1998 『現代民俗学の視点 二 民俗の言葉』朝倉書店。

庄武憲子

2019 「旧西祖谷山村の「変則地神塔」」『徳島地域文化研究』17。

菅豊

2013 『「新しい野の学問」の時代へ 知識生産と社会実践をつなぐために』岩波書店。

鈴木謙介

2013 『ウェブ社会の行方 〈多孔化〉した現実の中で』NHK ブックス。

高橋晋一

2004 「地神塔と三神塔」『徳島地域文化研究』2。

梅原達治

1984 「北海道地神塔の儀軌」『札幌大学教養学部紀要』25。

1985 「北海道地神塔の儀軌補遺」『札幌大学教養学部紀要』26。

ウェブサイト

羽黒町観光協会

2021 「羽黒観光スポット」, 羽黒町観光協会ホームページ, (2021 年 2 月 1 日取得, <https://hagurokanko.jp/facility/syukubou/>).

Megurun Inc.

2021 "Yamabushido," Tsuruoka: Megurun Inc., (Retrieved February 1, 2021, <https://www.yamabushido.jp>).

—第 3 部—

本事業の実施に当たり開催した第 3 回研究会の発表を再構成，編集したものである。発表を文章化するにあたり，論理展開に鑑み内容の修正，削除，加筆を行っている。

